

新・瘠我慢の説

経済学者

渡辺利夫

第十八回 自己承認欲求について

世界の「七つの海」を支配するイギリスが極東の小国日本と同盟を結ぶにいたつたはどうしてか。

その契機となつたのが義和団事件の平定に際して、日本の将卒がみせた規律と勇猛に対するイギリス側の高い評価であつた。

る方針を取り、清国兵を投入させて外国人討伐の挙に出た。亡国的な行為であつた。

ここで八カ国が連合軍を編成した。しかし外国人居留地域は敵に完全に包囲され、連合軍の兵站も尽きて万事休すとなつた。日本公使館書記生の杉山彬、次いでドイツ在清公使のフォン・ケッテラーが殺害された。事態の容易ならざるを察した日本は派遣隊を相次いで出兵させた。これに勢いを得た連合軍は通州を占領、さらに日本軍を先頭に定福庄へと前進して北京城攻撃のための布陣を敷いた。日本軍が朝陽門街道の以西、ロシア軍が以

南、米英軍がさらにその南に陣を張った。明治十三年（一九〇〇）八月十四日未明に日本軍の一隊が朝陽門に達してこれを爆破、場内に突入、翌日払暁に公使館区域に到着、乱徒を追い払い居留民を救出して乱は鎮定された。

連合軍と乱徒との攻防戦において最高の武勲を立てた人物が、在清公使館付武官の中佐・柴五郎であった。日清戦争に従軍ののち、在英公使館付武官を経て北京の公使館勤務となり、この間に義和団事件に遭遇。乱徒の鎮圧に水際立つた采配を振るつた。のちの日露戦争においても勇名を馳せ、大正八年には陸軍大将にまで上りつめた帝国陸軍を代表する指揮官の一人であった。

柴の一生を深い哀切をこめて描いた名作に、村上兵衛の『守城の人』がある。北京公使館区域防衛の要に位置する肅親王府に陣を張り、無数の敵軍に囲まれて狼狽える連合軍と居留民のなかに立つて鮮やかな攻守の機略をみせた「天性の軍人」の姿が活写されている。村上は柴の指揮下に入ったB・シ

ンプソンという当時二十三歳のイギリス人義勇兵に次のように語らせてている。

「数十人の義勇兵を補佐として持つただけの小勢の日本軍は王府の高い壁の守備にあたっていた。その壁はどこまでも延々とつづき、それを守るには少なくとも五百名の兵を必要とした。しかし、日本軍は素晴らしい指揮官に恵まれていた。公使館付武官のリユートナン・コロネル・シバである。彼は、他の日本人と同様、ぶざまで硬直した足をしているが、真剣そのもので、もうすでに出来ることと出来ないこととの見境をつけていた。ぼくは長時間かけて、各国受け持ちの部署を見て廻つたものが、ぼくはここではじめて組織されている集団を見た。この小男はいつの間にか混乱を秩序へとまとめた。彼は部下たちを組織化し、さらに大勢の軍人たちを召集して、前線を強化していた。実のところ彼はなすべきことをすべてやつた。ぼくは自分がすでにこの小男に傾斜していることを感じる。ぼくは間もなく彼の奴隸になつてもいいと思う

ようになるだろう」

ロンドンタイムズの従軍記者ジョージ・モリソンは、義和團事件の鎮定は日本兵の武勲なくしては不可能であつたと評し、ヴィクトリア女王は柴に勲章を授与した。日英同盟なくして日本の興廢を決するのちの日露戦争での勝利はなかつたであろう。

日英同盟交渉が開始されたのは、義和團事件が決

着した年の翌明治三十三年（一九〇〇）の秋からであった。春秋の筆法をもつてすれば、柴五郎こそが日英同盟を成立させる直接的なきつかけをつくり、この同盟の成立によつて日本は日露戦争に勝利することができたということになろう。

のちに駐清公使として義和團事件処理の全権を与えられて北京に赴任したのが小村寿太郎である。小村は外務大臣の青木周蔵に対して次のように進言したといふ。

「事変の最終解決に際し、歐州協同の外に置かる、ことなからしめんが、我国はその兵力並びに清国に於ける陸海軍の行動に於て、終始少なくと

も最強国と均等を保有せざるべからず」「「我国に対してもしこの好機に乘じ列国と懇切なる共同の精神を以て敏活且確実なる举措を執るに立てる優勢を制するを得べしと信す」（外務省日本外交文書デジタルコレクション「小村外交史上巻」）

いかにすれば列強の一員として迎えられるか。往時の日本外交の最大課題であつた。小村の進言は、その強い自己承認欲求を鮮明に表している。実際、日本は幕末期以来、領事裁判権を認めさせられ、関税自主権を剥奪されるという屈辱的な不平等条約をアメリカのみならずオランダ、ロシア、イギリス、フランスと結ばれていた。日清戦争が日本の勝利に傾いてようやくイギリスが、勝利後にはアメリカなどが治外法権を撤廃した。

しかし関税自主権については日露戦争勝利後まで待たねばならなかつた。列強との不平等条約改正に日本は明治の全期間を要したのである。大日

本帝国憲法を制定し帝国議会を召集して近代立憲国家システムの成立を急いだのも、不平等条約に甘んじているわけにはいかない。不平等条約にしてみずからが列強の一員として国際社会に加わらなければならぬという明治人の「不羈獨立」の精神のゆえであった。義和団事件に際して小村が、この事件の解決に日本は後れをとつてはならない、むしろ連合軍のなかで最強の力を保持すべきであり、それにより列強の信頼を得て日本の優勢を保たねばならないと述べたことの意味はそこにある。

フランシス・フクヤマは著書『アイデンティティ』(朝日新聞出版) のなかでこう述べる。
「自尊心は承認を求める。いくら自分の価値を自分で感じても、他者が公にその価値を認めなかつたり、ときには侮辱してきたり、こちらの存在を無視したりすれば、承認への欲求は満たされない。自尊心は他者から尊敬されることで生まれるものだからである。」

義和団事件に際して日本がみせた果敢な機略と行動の動因は、小国日本の自尊心を秘めた強い自己承認欲求にあった。小さな非白人国家の日本がみせた健気なばかりの真剣さであった。

限定的ではあれ集団的自衛権行使を初めて認めた平和安全法制が平成二十七年に成立した。この法案をめぐる与野党間の論戦、マスコミの論調、法案に反対する憲法学者の生硬で猛烈な「立憲主義論」のことが思い起こされる。内閣支持率を少なからず落としながらもなんとか成立したからよかつたものの、ああいう類の議論を延々聞かされていると、日本の政治思想は明治以来まるで成熟することなく、むしろ劣化の様相を呈しているのではないかという感を抱かれる。承認を求める自己そのものを喪失してしまっているのが現代の日本なのかもしれない。

わたなべ としお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長歴任。八五年、「成長のアジア」「停滯のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・太平洋賞受賞。九六年、「神經症の時代」で開高健賞正賞受賞。二〇一年、正論大賞。